

Book Review



史上最大の暗殺軍団 デンタルプラーク

奥田克爾 著



Reviewer

米山武義 Takeyoshi Yoneyama
(静岡県・米山歯科クリニック)

A5判、148頁
定価(3,200円+税)
医歯薬出版刊



私が最も尊敬する科学者の一人である奥田先生がこのたび、大変刺激的なタイトルの書籍を世に出した。このタイトルは奥田先生独特のユーモアかなと思いきや、とんでもない。われわれが毎日臨床で対峙しているデンタルプラークをあらゆる角度、特に細菌学と全身疾患の視点から捉え、最新情報を交え、とてもわかりやすく紐解いた解説書である。本書の内容をしっかりと読み砕くことにより、デンタルプラークがなぜ「史上最大の暗殺軍団」と称されるのか理解できるだろう。さらには診療室内において目の前にいらっしゃる患者さんや在宅医療における他の医療職・介護職および患者さんとそのご家族に、なぜデンタルプラークをコントロールしなければならないかを説得力をもって説明できるようになる。歯科学をおさえるとは正にデンタルプラークをおさえることに他ならない。本書はそうした意味で、座右の書になることは間違いない。

奥田先生からは私の誤嚥性肺炎やイ

ンフルエンザの予防研究において示唆に富むアドバイスを頂戴したことで、偉大な研究者でありながら大変身近な存在である。もともと研究に関して大変厳しい姿勢を貫いてこられた方であるが、その背景には常にデンタルプラークや歯科疾患を社会問題として捉え、警鐘を鳴らさなければならないという使命感をお持ちだからではないか。このことは本書の随所に感じられるが、先生自身が本書「はしがき」で述べられているように、本書を発行するきっかけは抜歯後に敗血症で命を奪われた患者さんの訴訟事例に関わったことだそう。われわれはデンタルプラークが口腔感染症の原因だけでなく、命さえ奪う存在であることを肝に銘じなければならない。

本書の内容を紹介すると「う蝕原性ミュータンス菌と脳出血との関係」、「歯周病は循環障害をもたらす」、「肺炎で死なないための口腔ケア」、「インフルエンザウイルスのサポーターは口腔内に潜んでいる」などなど、脳裏に焼

きつくタイトルをつけ、最新の研究情報をわかりやすく説明されている。この手法は奥田先生ならではのセンスではないだろうか。特に感銘を受けたのは、「口腔内細菌はインフルエンザウイルスの悪友」という表現である。全くそのとおりである。インフルエンザウイルスが“悪さ”をする背景には口腔内細菌の手助けが必要であることを指している。このことを患者さんに理解していただき、口腔の管理が習慣化するまで関わることは、並大抵なことではない、だからといって、ただ恐怖感を煽っても心に響かない。深いところで患者さんの動機づけをすることが求められるし、そのためには本書の内容をしっかりと理解しておくことが大切だ。

今回、私は臨床家としてデンタルプラークのコントロールの必要性を改めて強く感じさせていただいた。本書は細菌学者としてだけでなく一人間として患者さんを大切にしている奥田先生の心が伝わってくる優れた書籍であり、掛け値なしで一読をお勧めする。